

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会
編集人 同窓会会報編集委員会
印刷 常陽新聞新社



一高オリピック (体育館で)

土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠馬 作曲

- 一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水
- 二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影
- 三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり
- 四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

- 2面 会長あいさつ
- 2面 学校長あいさつ
- 3面 新任教頭・事務室長紹介
- 3面 平成21年度総会報告
- 4面 卒業60周年記念同窓会
- 4面 卒業50周年記念同窓会
- 4面 卒業40周年記念同窓会
- 4面 卒業25周年記念同窓会
- 5面 卒業15周年記念同窓会
- 5面 恩師を訪ねて
- 6面 卒業生レポート
- 7面 支部だより
- 8面 定時制部会だより
- 8面 お知らせ・話題
- 9面 母校だより
- 10面 職員室だより
- 11面 進路状況報告
- 12面 平成20年度決算報告等

同窓会会長あいさつ

幡谷 浩 史 (高4卒)



諸兄の近況消息が把握できそうで出来ない、事務局担当者も名簿の訂正等、充分に管理出来ないのが現状であります。

今般会員の皆様のご推挙をいただき「進修同窓会」会長就任という大役を引き受ける事になりました。元来浅知短才者ではありませんが職責を全うすべく精一杯頑張ります。今後ともご支援ご協力のほど宜しくお願い致します。母校の発展と隆盛を期すべくポジティブ思考を取り入れながら二人三脚で充実感のある運営に取り組み存在感のある組織を目指す所存であります。

さて当会活動の目的を具体的に申し上げますと、在校生の各活動に対する経済的支援を最優先とし、さらにOB会活動支援、会報発行(各支部会活動も含め)あるいは卒業生に対するOB会の周年行事開催等と活動範囲も多岐にわたっております。特に当会運営に直接関係のある名簿発行が今後重大で困難な課題となることは必至であると思われま。IT時代に生きていくにもかかわらず、OB

新任校長あいさつ

市村 仁 校長



進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。本年四月より校長を拝命いたしました市村と申します。

このような立場で土浦一高に関わる事ができますことを大変光栄に思いますと共に、県内屈指の進学校として確かな実績を残している本校のより一層の充実発展のため、微力ではありますが精一杯取り組んで参りたいと考えておりますので、今後ともよろしくご指導の程お願いいたします。

さて、例年のことではありますが、ここで在校生の学校での生活ぶりを報告させていただきます。現在の生徒数は、全日制972名、定時制109名(平成21年9月1日現在)と、まさしく「亀城一千」の生徒が集う学舎となっております。

進修状況につきましては、新聞、週刊誌等で「東大の合格者激減」などとして報じられ、ご心配をいただいたところで、東工大、一橋大、京大、国公立大、医学科等の合格者と併せた人数については、評価をいただける部分もあるのではないかと考えております。

しかしながら、東大の合格者数は、本校に期待されているもの一つでもありませんので、本人の希望や適性等をよく見極めた上で、しっかりと意識付けをしながら指導しているところであります。一方、在校生は、勉学はもとより、部活動にも積極的に取り組む、実に八三%

の生徒が活発に活動してくれています。今年度は、女子弓道部、水泳部、ヨット部がインターハイに出場したのをはじめ、美術部、写真部、文芸部、囲碁部が全国高文祭に、そして漫画研究部が二年連続で「まんが甲子園」に出場するなど、全国レベルで活躍しています。この他、八月につくば市で行われた全国物理コンテストでは、三年生の深井君が、上位6名に与えられる金賞と併せて、成績最上位者として、見事に県知事賞を受賞したところであります。

また、会員の皆様には懐かしい「一高三大行事」においては、数多くの生徒が実行委員として積極的に参画し、さすがと思わせる力を発揮してくれています。例年よりも早く五月末に開催した「一高祭」では、全体の実行委員会のもと、会場やゲートなどの部門別の実行委員会が組織され、それぞれに工夫された多彩な企画が催されました。内容的にも文化祭にふさわしく、且つ二日間の一般開放に十分耐えられるものであります。

二日間の来場者数、実に五千人というこの数こそ、本校並びに在校生への期待の表れでもあると強く感じたところであります。続く、九月の「二高オリピック」は、夏休み直後で十分な準備期間のない中ではありましたが、昼休み等の大縄跳

びの練習などで機運を盛り上げ、絶好の天気当日を迎えることが出来ました。短時間で準備をし、審判として運営に関わり、選手として積極的に活動する生徒に、与えられた一日をいかに楽しむかという意味でも、集中力を感じたところでもあります。

そして、十月の「一歩く会」。今年度は、実行委員の希望もあり、従来の八郷からのコースを少し手直しをする事になりました。九月上旬の最終下見までに十回を超える回数を歩いた生徒も出るなど、実行委員の自主的で綿密な準備により、一人ひとりととりとて、三十キロを歩くという貴重な体験の日とすることが出来ました。これら三大行事の他、夏休みには、中学生を対象に「一学校説明会」を実施いたしました。五日間の期間中、保護者の方々を含めて約千二百名に参加をいただきました。

在校生はもとより、これらの本校を指してくれている多くの中学生の力をも結果し、会員の皆様も築いてこられた歴史の上に何が積み上げられるのか。これこそが、今の私共と課せられた大きな課題であると感じております。在校生一人ひとりの高い能力をいかに伸ばすか。在校生一人ひとりが、より高い目標の実現に向かって、いかに着実な努力を続けさせるか。そして何より、在校生一人ひとりを、いかに将来にわたって伸びていける人材と出来るか。

教職員一同一丸となって取り組んで参りますので、会員の皆様の物心両面にわたるご支援、ご協力を改めてお願いするところであります。

新任職員紹介

定時制教頭 井坂 洋二



同窓会副会長として微力ながら事務局の務めを果たしてまいります。よろしくお願いたします。

事務室長 市村 安永



進修同窓会の会計を仰せつかりました市村です。日々、土浦一高に感動しながら勤務しております。よろしくお願いたします。

平成二十一年度

進修同窓会総会開かれる

去る四月十二日(日)、平成二十一年度定期総会が、母校土浦一高体育館において会員多数出席のもと盛大に開催されました。

総会は、恒例となった応援指導部のリードと吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会し、物故会員への黙禱の後、大曾根宏亮副会長、市村仁校長の挨拶があり、大野金一副会長議長のもと以下の議案が審議され、可決承認されました。

一 第一号議案 平成二十年度事業報告及び決算報告について(12ページに掲載)
二 第二号議案 同窓会役員の改選について
平田公敏会長死去により、副会長の幡谷浩史(高4)を新会長に選出。

三 第三号議案 平成二十一年度



校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱

事業計画(案)及び予算(案)について(12ページに掲載)

総会後、卒業周年祝賀式に移り、中四十八回・高一回(六十周年)、高十一・定九回(五十周年)、高二十一・定十九回(四十周年)、高二十六・高理十三・定三十四回(二十五周年)に加えて、本年は試行として卒業十五周年にあたる高四十六回・高理二十三回の方々もお招きいたしました。祝賀式では、来年五十周年を迎える高十二回の北島瑞男氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、高十一回の市川紀行氏より、本年卒業五十周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。また、会場を移動しての祝賀会にも数多くの方々の参加があり、一転して賑やかで和やかな祝宴がもたれました。



総会の会場風景

卒業六〇周年記念祝賀会

土浦一高第一回卒業生祝賀会

平成二十一年度我々同窓会は新制高校卒業年次に合わせるため前回先輩の六〇周年同窓会から二年の空白を置きました。それにも拘らず出席者は写真から漏れたものも含めて五〇名に達しました。連絡した一八八名中回答は九九名出席率二八%ですから先輩達の頃から徐々に寿命が延びて来ていることが窺われ、目出度い限りでした。

何十年も母校に見えなかった人達が多かったから在校生吹奏楽団が奏でる中、会場一番前列に着席した我々前の舞台に生徒達が校旗を立てて静々と入場して我々を榮譽礼で迎えて呉れました。左足を左へ挙げては下ろして直立不動され一同君が代斉唱後第一応援歌を始めに第三まで歌い上げ、フレイッシュフレッシュ土浦一高には喚声が高まりました。昔我々の在

青春そして白秋

(11回生 卒業50周年)

母校の校歌にならえば、沃野一望の筑波山を仰ぎ、終古寄せるさざ波の霞ヶ浦を見晴らして三つ歳を過ごした一高の門を旅立つてから半世紀が過ぎました。その節目に当り進修同窓会が催して下さる祝賀の集いを一層意義あるものにしたと私たちは記念事業実行委員会を発足させました。「名簿」「記念誌発行」「前夜祭」各担当にゴルフ懇親の「一望会」30名と近隣在住の仲間数名がはり付き活動を展開しました。万全のチームワークはまさに「一高生」のものであります。

「記念誌」には恩師の方々や百三十名の思い出が寄せられました。海外生活と日本人論、農業への道、百里平和運動少年の公務員試験関東トップ合格、夢の甲子園を果たしたクラスメイト球児への誇り、わずかに四人の女子の一人の述懐「校歌はなぜ亀城一千の健男児のみなのか!」、入学時に「ハイ、これはこういうことです」と一日に数十ページ進む数学授

校中は校旗も応援団もありませんでしたから六〇年の歳月に今昔の感を深めました。母校の発展に涙を浮かべ喜ばれました。総会受付係には北沢隆三・林実・山藤和夫・桜井孝之・長谷川宏・今橋昭・比



企光雄諸氏が忙しかつたがやがて総会が議して我々周年の記念式典が開かれて高一一北島瑞男元水戸二校長先生が代表祝辞されて後、記念品贈呈の学年代表は砂山嘉幸君がなされました。続いて会場はホテルカンコーに移され幡谷浩史新進修同窓会会長が真っ先に我々学年に駆け付け更に祝辞を頂いて後乾杯になったのですが遙か神戸先の三木市から見え、予定した酒井隆夫君が紛れて見えないので(後では見えたのですが)代わって市川家正君が幡谷会長と共に音頭を取りました。懐かしい顔ぶれ達は何時までもゆつくりとおビールにお酒に懐旧を偲んで居りましたが最後には記者木島の締めで終焉致しました。今年に限って反省のため目下秋季同窓会を準備中です。若し、我々が後一〇年健在に過ごせて米寿の年に相当数の顔が寄せられればあやかって七〇周年記念式も夢ではないでしょう。素晴らしい六〇周年記念祭でした。(木島幸夫記)



業、修学旅行復活運動、クラブ活動や文化祭、ひとりひとりかけがえのない思い出やその後の生きざまが語られています。

す。「過ぎ去っても過ぎ去っても青い春」という一節もあります。私たちはこの記念誌に「青春そして白秋」と名づけます。一高史初の50周年記念誌です。筑波山、ホテル青木屋での「祝賀前夜祭」も盛り上がりしました。札幌や関西からも飛んできて、85名の車座を組みました。「女子一高生」も三名揃いました。恩師の諏訪先生、大竹先生もお元気な姿を見せて下さり、酔うほどに語らうほどに深々と夜は更けて行きました。全員で肩を組み声張りあげた校歌の大合唱は尽きぬ名残りをのせて高くひびいていました。友の目にあふれた涙は美酒のみのせいでなかつたでしょう。翌日の祝賀式典には百二十名が出席し、玄関前の記念撮影には新たな出会いの輪が広がりました。当然ながら私たちは振り返り懐かしむばかりではなく、古稀近い今を強く生きねばなりません。「記念誌」で仲間たちが引いている詩人サミュエル・アルマンの言葉を共々にかみ締めたいと思えます。「年を重ねただけで人は老いない。4面へ続く

3面からの続き
理想と情熱を失った時、人は初めて老いるのだ。」
「早速した同窓50名の霊よ安かれ、十一回生よ、更に健勝であれ」と祈りながら50周年の記とさせて頂きます。進修同窓会の皆様、本当にありがとうございます。
(十一回生 市川 紀行)

高二十一回卒業四十周年

四月十二日、満開の桜のもと、私たちの卒業四十周年記念同窓会が開かれました。午後一時、母校体育館で祝賀式典、六十、五十、二十五、十五周年の先輩・後輩の方々とともに進修同窓会本部よりお祝いをさせていただきました。私たち四十周年組は百余名の懐かしい顔がそろいました。四十年前とすこしも変わらぬ者、メタボや髪が薄くなったりして、ネームプレートがなければ全く誰だか分からない者、さまざまですが、お互い「おい」「おまえ」と一声かければ、当時「おまゝ」がえり、気持ちは一つになりました。六十・五十周年組の先輩の方々と一緒に学んだわけでもなく、初対面の方がほとんどですが、母校が繋ぐ縁、やはり懐かしさ、喜びを共に分かち合うことができました。さらに二十五・十五周年組の後輩の諸君は、私にとつて教子でもありますので、その姿に接し、教師としての喜びもかみしめることができました。

式典が終わり、私たちは祝賀会会場の「ホテル観光」まで歩きました。真鍋坂、筑波線新土浦駅跡、新川、横町、本町と旧水戸街道を辿り、桜橋から土浦駅、常磐線を渡り、霞ヶ浦湖畔の会場へ。四十年前、一高祭、体育祭、野球応援、学校行事のたびに、みんなで歩いた道程です。誰からもなく「沃野一望数百里・・・」、四十年前と同じ歌声がありました。

四十年前は大学・学園紛争の最盛期。東大安田講堂の攻防戦が一日中テレビ中継され、その年の東大の入試は中止となりました。浪人してお茶の水の予備校に

通いましたが、毎日のように明大、日大、東京医科歯科大に機動隊が出動、使用された催涙ガスが消えず、涙を拭きながら歩いていったのを思い出します。高校卒業後、社会人となってからは仕事に追われて、私たちは「母校」を特に意識することはありませんでした。私も「母校」に長く奉職させていただき、素晴らしい教え子(後輩たち)に恵まれ、仕事が楽しかったのは事実ですが、自分にとって「母校とは」と、深く考えたことはありませんでした。創立百周年記念誌「進修百年」を編集した際に、多くの先輩方の足跡をたどり、学校の価値は育て上げた人材の如何によるものだということがわかったくらいです。

しかし、同窓会準備の会合を重ねるなかで、私たちは土浦一高での三年間は何かであつたのか考えさせられました。学園に励んだとは言えず、碩学の師の講義も身につくに至らず、大それたこともできず、平凡な高校生活であつたことを、いさかかもつたいなかつたと顧みるばかり。しかし、三年間無駄であつたのかと問われたならば、はっきり「否」と答えることはできません。よき師、よき先輩、よき後輩。人生においてこれほど人となる同級生。生きているうちに友人に恵まれた日々はほかにありません。重要文化財の校舎、高い天井、楠の大樹、母校のすべてがなつかしく有り難く思われます。少なくとも若き日の未熟な心に、校歌に歌われているように「筑波の山のいや高く、霞ヶ浦のいや広く」の志を母校が育んでくれたことは間違いないと思います。母校の有り難さをかみしめながら、同窓生とともに、美酒を酌み交わした一日でした。

進修同窓会、祝賀式、祝賀会には、周年学年の一つとして招待を受け、記念品をいただきました。このような機会を設けていただきました同窓会本部の方々には深く感謝いたします。今後とも、同窓生一同、母校と進修同窓会の発展のために寄与していければと思っております。最後に、同窓会の準備にあたり、いろいろとお世話をいただきました旧担任の先生方、事務局として短い時間で企画をまとめた井上正治、菅原加津司両氏に、この場を借りて御礼申し上げます。たいと思えます。(高三十六回卒業大 曾根 靖夫)

卒業二十五周年記念同窓会

去る四月十一日、卒業二十五周年を記念し、我々全日制普通科三十三回生・理科十三回生は学年全体での同窓会を開催いたしました。同級生の多くは卒業後全国に散らばっているため、地元に残っ

ている有志で幹事団を結成し、約半年の準備期間を経ての開催です。大恐慌以来とされる経済危機の中、一体どれだけの集まるのかという不安をよそに、お一人を除く恩師の先生方のご出席も賜り、総勢百六十名による大同窓会を開催することができました。

当日は、懐かしい顔ぶれが続々と集まり、中には一目見ただけでは誰だかわからない人もいましたが、言葉交わせばすぐ二十五年前にタイムスリップし、当時の記憶がさまざまなと蘇ってきました。開会に先立ち、クラスごとに記念撮影を行いました。その頃にはすっかり一高時代に戻った感があります。

山本彰治・大手ひろみの司会の下、亡くなられた同級生に黙祷を捧げ早すぎる死を悼むとともに、井上規による開会の言葉から始まり、幹事代表として私が挨拶を申し上げました。続いて、事務局の菅原加津司から会費の内訳や母校への寄付金について説明した後に、当時の学年主任である小沼先生から挨拶をいただきました。小沼先生の語り口は今も全く変わらぬまま、当時の授業風景が会場に広がった気がいたしました。さらに、学年副主任の植木先生から乾杯のご発声をお願いし、同窓会の幕が切つて落とされました。

恩師の先生方や同級生との歓談の時間はあっという間に過ぎ、恩師の先生方への記念品贈呈の後、演壇に各クラスが集まり、担任の先生のご挨拶をいただきました。卒業アルバムの写真のスライドショー化し、会場に投影していただくもあり、思い出に一層の花が咲きました。応援団の大山義弘によるエールと全員による校歌斉唱の頃には、予定した時間一杯となり、再開を約しての一次会お開きとなりました。

翌十二日の同窓会総会、祝賀式、祝賀会には、周年学年の一つとして招待を受け、記念品をいただきました。このような機会を設けていただきました同窓会本部の方々には深く感謝いたします。今後とも、同窓生一同、母校と進修同窓会の発展のために寄与していければと思っております。最後に、同窓会の準備にあたり、いろいろとお世話をいただきました旧担任の先生方、事務局として短い時間で企画をまとめた井上正治、菅原加津司両氏に、この場を借りて御礼申し上げます。たいと思えます。(高三十六回卒業大 曾根 靖夫)



展のために寄与していければと思っております。最後に、同窓会の準備にあたり、いろいろとお世話をいただきました旧担任の先生方、事務局として短い時間で企画をまとめた井上正治、菅原加津司両氏に、この場を借りて御礼申し上げます。たいと思えます。(高三十六回卒業大 曾根 靖夫)

卒後15周年記念同窓会

過日、我々普通科46回、理数科23回卒業生399名は、卒後15周年記念祝賀会にご招待いただき、その後同窓会を開催いたしました。

これまで、進修同窓会では、卒後40、50、60周年の記念祝賀会が開催されておりました。昨今、地元を離れ同窓会との関係が希薄化し、同窓会への参加者も年々減少傾向であることから、初の試みとして我々卒後15周年の学年に声がかかりました。卒後15年、34歳を迎える我々は、社会にでて高々十数年。まだまだ若輩ですが、社会、家庭においても徐々に責任が増え、忙しい活動している世代であり、卒業直後には懐かしんだ高校時代の思い出も、いつの間にか記憶の

片隅に追いやられ、連絡を取りあう友人も徐々に少なくなってきました。祝賀会のお話を頂戴し、改めて同窓会名簿を見渡すと、かなり空欄が多く、現住所不明の同窓生の数に驚かされました。昨今の個人情報保護、振り込め詐欺といった社会情勢を反映しているのでしょうか。卒業アルバムとの照合を行っても、399名の卒業生のうち106名の方のご住所が判明しませんでした。はがきでのご連絡に引き続き、インターネット掲示板、メールを利用し、同窓生同士の間をつなぐから最終的には120名の同窓生と連絡を取ることができました。

準備を進めるうち、徐々に手伝いをいただける仲間も増え、当日は5名の恩師をお迎えし、56名の同窓生と日付が変わるまで思い出を語りました。「次回の同窓会は10年後、卒後25周年です」という幹事の声に、「10年後は長すぎる、5年後にもう一度」という声とともに大きな拍手が湧き上がり、準備不足を認めなかったドタバタの同窓会も無事幕を閉じることができました。

現在はメールリストを作成し連絡を取り合っております。同窓会直後の6月には進修同窓会東京支部へのお誘い、7月には浜野先生のブルーベリー園訪問の会(？)、10月には女性陣のおしゃべり飲み会、と各地でミニ企画が持ち上がり、順調に交流を深めております。本稿執筆時には土浦での忘年会を企画中です。

新たな試みとして開催された卒後15周年記念祝賀会、同窓会でありましたが、高校時代の面影を残しながらも、互いに成長した仲間と会う機会を得られたことは、大きな喜びであり、貴重な時間でありました。お招きくださいました進修同窓会に心より感謝申し上げますとともに、益々のご発展をお祈りいたします。最後になりますが、今御連絡できなかった同窓生の皆様、せっかくの機会にお招きできなかったことをお詫言申し上げます。本稿が目にとまりました折りに、他の同窓生の消息などを含め、御連絡いただければ幸いです。

livre.ec@gmail.com
高46回卒業生 本田哲史

恩師を訪ねて

⑫

理科池井芳寛先生

在職 昭和二十五年四月〜昭和四十七年三月(教諭)



木犀の馥郁とした香りが漂う中秋の日、高津台にある先生のご自宅に向った。手入れの行き届いた庭に爽やかな風が流れる一室で四方山のお話をしていた。三人兄弟の末っ子として生まれ、多感な旧制中学時代に太平洋戦争が勃発し、二人の兄を失いながらも志した教育者の道を歩んだ学生時代。学業を終え、始めての赴任校である土浦一高。そこでの担任・理科科主任として生徒と過ごした教員生活。その後の新設校準備や管理職としての活躍されたことなど、若い頃のままの先生の物静かなお話に時の経過を忘れるほどであった。ここに、お話しされた半生の記を掲載させていただいた。(編集委員会)

「終戦前後・教育者を志す」

昭和十九年旧制銚田中学五年の時、新しく赴任されてきた物理の先生の講義が非常にわかりやすく、熱のある授業だったこともあり、元来好きだった理科への興味がますます強くなり、将来機械や工作など理科関係の仕事をしたいと考えてようになった。時代は戦争末期の頃である。勤労動員で私達は日立にあった電線

工場に連日のように行き、出来上がった銅線の直径をマイクロメーターで検査する仕事に従事した。卒業間際の昭和二十二年二月長兄戦死の報を受け、次兄も逝去した。残された自分の進路を考えることになった訳だが、母方の祖父と伯父が小学校の校長であったこともあり、教師への道を考えるようになった。戦争は日ごとに激しくなり、若者が大勢戦地に送られた。そのため旧制中学の教師が不足しており、その対策として東京高等師範学校(現在の筑波大学)に三年課程の教員養成所が設置された。わたしはそこへ志願し、合格後東京での生活を始めた。首都東京での戦火は厳しく、私たちは羽田の兵器工場へ派遣され、終戦までの五ヶ月間、宿舎で一日おきからに教授による集中講義を受けながらの生活であった。養成所三年終了時点で、学力の不十分さを痛感し、更に二年課程の物理研究科へ進んだ。当時の東京は終戦直後のこと、生活諸般に渡って非常に悪く、たとえは電力事情ひとつをとっても、夜停電などは日常だった。しかたなく鉄道の踏み切りで、またまた雪時代の観を呈していた。書籍の出版が極端に少なく、たびたび上野の図書館に通ったのもだった。

「生徒との出会い」

昭和二十五年三月苦学の末に高師を卒業し、土浦一高に欠員があり、めでたく採用となった。同校を希望したのは、ひとつには私の父が土浦中学で学び、大学卒業後土浦を出発点として地区裁判所(現法務局)で勤務したゆかりの地でもあり、学校や町への思い入れもあったからである。赴任した土浦一高は、戦後の混乱から

世の中全体がよくやく落ち着きを取り戻し、最も若い私から見ても、教師集団は年配の先生方が多く、教師としての自覚を持った毅然とした姿勢で、生徒に接していたと思う。大職員室は学年別に担任が机を並べ、私自身この先生方から多くを教えられた。

生徒達も純真素朴、若かった私に親しく接してくれた。一言で云えば、学校全体が厳肅で重厚なたたずまいのなかにあった。日々の授業を通して心がけた指導理念は「なによりも、かけがいのない自分の人生、いい加減にしない。努力することこそ大事。そして個性を性急に固定化せず、柔軟に時間をかけて見極めること」を信条としてどの生徒にも向き合っていた。一高在職中にクラス担任を何度か受け持ち、それぞれの学年で生徒との貴重な出会いが生まれた。七回生：初めての担任である。習熟度別学級編成を二年次に二クラス設け、一組を古橋靖先生が、次に後のクラスを私が担当した。女生徒二名を含む成績の優れた素直な努力家クラスだった。一人暮らしの私を集団で誘ってくれ、鈍子まで遠征したことでもあった。後に俳優となった柳生博君などもその一人であった。十三回生：進路が文系・理系半々の優れた個性的クラスだった。卒業後も高校時代の友情と絆がずっと続き、現在も毎年クラス会を開くほどである。私も同席させてもらっている。十六回・十八回生：どちらも理系志望のクラスで、学年は異なったがどちらにも共通する雰囲気があった。静かでありながらも積極的に取り組む姿勢。生徒の方からこちらに積極的に相談してくる意欲を持ち、印象深くまことにやり甲斐のある日々であった。卒業後十八回の長門ことさんが東進会の幹事代表となったこともあり、その後も東進会一八会と称して毎年、東京を中心にクラス会を開き、絆を深めていることは嬉しいことである。

「理科科発足」

高度成長や高校進学率の上昇などに伴って、理科・数学の優れた人材育成を目指して理科科が設置され、初代の主任に任命された。土浦一高において、開校以来普通科のみであったこともあり、当時、能力別学級編成が教師や生徒からの批判で解消されたところでもあり、それに逆行すると懸念された。さらには普通科が一学級減ともなり設置についての共通理解が得られずにいた。このような中で発足した理科科は、学校内外で特異なクラスとして注目され、理科科の生徒の中には心理的な葛藤も生じた。担任として、生徒達に対して「同じ一高生としてのプライドを無くさないでがんばること」、「学習指導要領で定められた理科・数学の授業時数は変更できないが、やや時数が減少している国語・英語等を決しておろそかにしないこと」など意欲の喚起を中心とした三年間であった。結果的に国立理系四名を含め、理系二十七名、医学一名、薬学二名、教育二名その他となった。

「理科教師としての日々」

土浦一高には二十二年間の長きに渡って在職した。初めの頃は比較的確のどかさ漂わす、田圃の地方都市の伝統校としての校風はあったものの、学校の特色というか全体的ななごとの方向性といったものは感じられなかったように思われた。時代と共に卒業後の進路に対する保護者の意識の変化など、次第に学校としてのレベルアップがなされ、そのための組織的な教育活動へと、菅沢先生、古橋先生さらには片岡先生などを中心として進学体制が強化された。進路指導部での進学要覧の作成、整備、学力別学級編成そして主要科目である国・数・英等の授業第一とし、進路別のクラス編成なども積極

的に導入された。昭和三十年代になると、学級増で八クラス編成になり多様化する生徒の進路に対応して、より綿密な進路指導委員会による面接(カウンセリング)なども始められた。それらの積極的な試行が今日の土浦一高の学力隆盛の礎になつていると思われる。

「現在の日々」

理科教師としての日々については「自然科学は、その実証性と論理性がある」ことから戦後五年経過しても当初は理科の施設設備は十分に十分であった。この状況下で、物理授業の徹底を図るべく、実験器具の自作を心がけた。たとえば落下運動による「g」の測定装置や水波投影装置、X線の発生装置など試みた。実際の実験を通して、生徒の興味意欲が高められたことなどが実感できた。このことは、昭和四十二年の理化全国大会・茨城大会において報告できたことは、幸だった。

妻が平成八年に発病、一年七カ月の闘病生活後に死去し、現在「妻への追憶」の手記を執筆の日々。妻の好きだった庭の植木(花木)の手入れの日々。

孫達の成長を見守る日々。

などという日々の中で卒業生のクラス会や卒業記念同窓会などで卒業生と歓談の時を過ごすことで、皆さんから元氣をもらっている幸を感嘆している昨今であります。

【略歴】

- 一九二八年 桜川市岩瀬町生まれ
- 一九四五年 旧制銚田中学校卒
- 一九四五年 東京高等師範学校入学
- 一九五〇年 同校研究科卒
- 一九五〇年 土浦一高理科教諭
- 一九七二年 石岡二高理科教諭
- 一九七五年 水戸一高理科教諭
- 一九八〇年 新設高教頭
- 一九八三年 水戸一高教頭
- 一九八四年 新設高準備(十月)
- 一九八五年 江戸崎西高校長
- 一九八八年 荻崎高校長
- 一九八八年 同校校長退職

卒業生レポート

⑭

「生きた研究室」で学んだこと

TBSテレビ情報制作局 制作情報考査部長

玉手義朗

高二十九回(昭和52年卒)



「次の号は土浦一高を取り上げようと思うのだけれど...」編集担当者の提案に、私は戸惑った。私は現在、日本航空が発行している雑誌「アゴラ」に、「建築は時代を語る」という連載を執筆している。日本各地の「西洋館」を採訪するもので、2003年4月の連載開始以来、日本銀行本店や三菱財閥の岩崎邸など、様々な建築を紹介してきた。この連載で一高校舎を取り上げようというのだ。

編集担当者の提案に戸惑ったのは、一高の校舎に思い入れがなかったからだ。床に塗られるワックスの臭いが苦手で、教科書を落とすとすぐ汚れてしまうことも不快だった。大きな窓で室内は明るかったが、その分だけ冬は寒かった。他校が近代的な校舎に生まれ変わって行くのを横目に、明治時代の校舎を使い続けざるを得ない状況を、恨めしく思っていたのだ。

「他にも立派な建築があるのに」と思いながら、私は一高の「取材」へ向かった。土浦駅の改札を出ると、様変わりした駅前姿に驚かされる。丸井も西友もなく、イトーヨーカドーが堂々たる店舗を構えていた。

かつての町の面影を探しながら、徒歩で一高へ向かう。憧れのデパートだった「京成百貨店」は駐車場に、馴染みだった本屋もなく、踏切が消えていたことで、筑波線の廃線を知った。大きく変わった町の風景に、言いようのない寂しさを感ずってしまった。

雑誌の取材での一高再訪だったが、私の「本業」はTBS(東京放送)での番組制作だ。しかし、ここまでの道のりは「寄り道」の連続だった。一高を卒業後、私は筑波大学に進学した。大学では経済学を中心に学び、卒業と同時に東京銀行(現三菱東京UFJ銀行)に就職した。

父親が大学教授だった影響で、一高生の頃から将来は学者になりたいと考えていた私は、当然のように大学院へ進学するつもりだった。ところが、会社訪問が解禁されると、「ヒマなので、見学してこよう」と気軽に面接を受けた東京銀行から内定をもらってしまっ

た。経済学を研究する上で金融ビジネスの経験は役に立つと考え、いざれ学者の道へ戻るつもりで東京銀行に入行した。東の間の「寄り道」のつもりだったのだ。

外国為替ディーラーとしての日々

1981年に東京銀行に入行した私は、3年後に外国為替のディーラーになった。通常の取引は1000万ドル。「10 Million」(「10M」)は「買い」の意味で1000万ドルを買い取り、「売り」なら「10 Sell」となる)といった声飛び交うディーリングルームは、瞬時の判断の誤りが巨額の損失につながる「戦場」だった。

その「戦場」で死にかけたことがあった。1987年10月19日の「ブラックマンデー」に巻き込まれ、「億単位」の損失を一夜で出してしまったのだ。「もう終わりだ」と絶望、「自殺」の文字が頭をよぎったのだ。すぐに「自分のお金じゃない」と、開き直ったが、

外国為替ディーラーの仕事を通じて痛感したのは、経済理論が役に立たないということ。研究室の中で構築した理論では、経済活動を解明できないことを教えてくれたのが、ディーリングルームといふ「生きた研究室」だったのだ。

テレビ局への転身

私は1989年に東京銀行を退職し、Manufacturers Hanover Trustというアメリカの銀行に転職した。いわゆるヘッドハンティングだ。ディーラーとしての実力を試そうと考えたのだったが、転職から3年後、思わぬ転機が訪れた。テレビ局への転職である。

TBSが経済部を強化するため、中途採用を行うことになった。

TBSに知人がいたこともあり、「面白いかもしれない」と、話を聞いてもらううちに採用となつてしまった。私はまたまた「寄り道」をすることになったのだ。

TBSでの仕事は外国為替ディーラー以上に、刺激的なものとなった。報道局の記者となった私は、取材現場を回ってニュース原稿を書き、自らがカメラの前に立つてレポートを行うこともあった。

事件や事故は何時、どこで起こるか分からない。昼夜、そして休日問わず呼び出しがかり現場へ直行、そのまま何日も帰れないということも少なくなかった。東京・茅場町の東京証券取引所の詰めだった時のことだ。記者クラブに着いた直後、本社から電話がかかってきた。「地下鉄の駅へ走れ!」と、切迫したデスクの声。「株式市場の取材がありますが」と言うと、「そんなもの忘れてしまえ!」という怒声と共に電話が切れた。

駆けつけた地下鉄茅場町の駅では、信じ難い光景が広がっていた。多くの人が路上に倒れ、救急隊員が懸命の救護活動を行っていた。しかし、ケガをしている人は一人もいない。脱線などの通常の事故ではないことは明らかだった。

やがて、現場の警察官から聞き慣れない言葉が出始めた。「サリン」、「オウム」、「麻原」...この日は1995年3月20日、地下鉄サリン事件が発生した日。この瞬間から経済の取材はそっちのけで、「オウム真理教事件」の取材に奔走することになった。

TBSでは経済部のみならず、報道番組のディレクターや情報番組のプロデューサーなど、様々な

制作現場で仕事をした。ニュースの現場に行き、当事者に直接話を聞くことで、より深い認識を得ることができた。TBSでの仕事も「生きた研究室」だったのである。

懐かしの校舎との「再会」

正門を通り、緩やかな坂を登り切ると一高の校舎が見えてくる。久しぶりに見た一高の校舎だが、その見事なプロポーションと高い完成度に驚かされた。それまでに取材してきた西洋館に引けを取らないもので、重要文化財に指定されているのも納得だ。

校舎内に入ると、あのワックスの臭い。昔は嫌いだったが、今は心地よく感じる。土浦の町が大きく変貌し、懐かしの風景が失われてしまった中、昔と変わらぬ姿で迎えてくれた一高校舎を見つめてみると、高校時代の思い出が鮮やかに甦ってくる。合格発表を見てみると、研究者を目標にしていた高校生の自分を思い出した。「寄り道」ばかりしてきた50余年だったが、これでいいのだろうか? 「生きた研究室」で学んだことを生かした独自の経済理論を構築できないか。こんな思いを抱かせてくれた、一高再訪であった。

経歴
1958年 土浦市生まれ
1981年 東京銀行入行
1988年 Manufacturers Hanover Trustへ転職
1992年 TBS入社
・社会部 経済部記者
・「ニ放」の森「ニ放」ディレクター
・「C放」の森「C放」ディレクター
・「みん」の森「みん」ディレクター
・「プロ」の森「プロ」ディレクター
著書:「相場の内幕」(集英社)
「経済入門」(ダイヤモンド社)
連載:「建築は時代を語る」(月刊誌「アゴラ」日本航空発行)
「目からウロコ」(経済用語・一語千金)(集英社・携帯電話版)

支部だより

土浦三中学生支部



この地区は土浦第三中学校の通学範囲にあり、在住する同窓生も中学出身者が多く、お互いに顔見知りという特徴があります。本部の方針として、支部活動の活性化ということが打ち出されたこともあり、有志で相談した結果、一旦荒川沖・乙戸支部を解散した上、新たに「土浦三中学生支部」として発足する案をまとめました。

荒川沖・乙戸支部総会と土浦三中学生支部設立総会は三月十五日土浦市中村南にある「レストランポセイション」で開催しました。設立総会には、四十四名の同窓生が出席しました。

本部からは、当地区在住でもあり大曾根宏亮進修同窓会会長代行殿、また母校からは豊崎利明教頭殿のご臨席をいただきました。

荒川沖・乙戸支部の解散と新支部の設立については、参加した方の満場一致で承認いただき、ここに新生「土浦三中

地区支部」としてスタートすることになりました。

支部長として、西谷隆義氏（昭和三十四年卒）副支部長に深谷俊則氏（昭和三十五年卒、久重光人氏と秋山尚夫（昭和三十六年卒）が就任しました。総会終了後懇親会を行いました。旧制中学を経験している大先輩から二十代の若者までそろいまして、楽しい歓談のひと時を過ごしました。私見になりますが、私は、この地に育ち土浦三中を卒業しているのですが、子供のとき以来の懐かしい方にお会いできましたし、新たにお住まいになられた方と高校の同窓ということでも交流ができることはすばらしいことだと感じました。今回は、準備の都合もあり、昭和五十三年以前の卒業生にご案内を差し上げられ以降の方には、希望された方に参加していただきました。次回からは、同窓会本部など関係する方々にご協力ご指導を得ながら、より充実した支部活動を進めたいと思っています。

（事務局長 秋山尚夫）

八郷支部

「八郷進修会」は、昭和三十年に先輩の方々の尽力により、旧土浦中学と土浦一高出身者で、八郷に住んでいる者をもつて結成され、相互の親睦と交流を図ることを目的に活動してきました。会員は、地域の中堅の立場で活躍する年齢等を考慮して高校三十二回卒業生までとし、現在百二十一名となっています。会は、会長・副会長・常任理事・幹事若干名が運営し、毎年二回の役員会の後、八月に総会を開いています。

今年度の「八郷進修会」は、八月二十二日午後二時から国民宿舎「つくばね」で開催しました。当日は、恒例の記念撮影を「つくばね」の玄関前で行い、会場では、今年度三名の物故者に黙祷をささげて開会しました。

会は、佐藤芳男副会長の司会で進められ、関野和夫常任理事の開会のことばに

始まり、比企光雄会長挨拶の後、会長が議長を務め議事に入りました。

先ず、平成二十年度の会計報告が会計担当の関野氏からあり、承認された後、役員改選は現役員の留任となりました。続いて「その他」の話題として、出席者を増やす対策が話し合われ、開催時期等も含め、今後検討改善して行くこととして議事を終えました。

次に来賓挨拶に移り、進修同窓会副会長の大曾根宏亮先生から、同窓会の人事・事業・支部活動、日本館の活用状況等について詳しく説明をいただきました。次に市村仁校長先生から、土浦一高の進学状況、「高祭」等の学校行事の内容・母校の躍進に頼もしい思いになりました。また、県下議員の桜井富夫先生からは、県下の高校の状況と問題点等についてお話を伺い、吉川勇常任理事の閉会のことばで会を閉じました。

続いて懇親会に移り、関野副会長の進行で進められ、木崎真氏（旧中四十回卒）の音頭で乾杯し、宴を開けました。同郷で旧知の会員が多く、互いに共通の話題も豊富で、若き日の思い出も懐かし話も弾みまわりました。来賓の先生方も親しくお入り頂き、大いに座が盛り上がり、最後は、全員で土浦一高校歌を声高らかに歌い、小林恒吉氏（高三回卒）の音頭で方歳三唱をして閉会とし、稲田茂美幹事の尽力で出来上がった閉会前の写真を手にと散会しました。（幹事 三輪志郎）



（幹事 三輪志郎）

定時制部会だより

平成二十年度より会長職を仰せつかり、最初の行事は「星座の会」の挙行でした。この会の名称は生徒の文集「星座」から引用させて頂きました。

特徴は恩師・父兄・定時制OBの親睦会と言う事です。桜井光孝先輩から「今回は飯嶋宏先生（部会顧問が定時制軟式野球大会の五十五周年記念大会に優秀体育指導者として、受賞されているのでその御祝を兼ねてやったらどうか？」との進言を受けたので早速、石神毅副会長と飯嶋先生は同級生だったので相談して、連絡・調整役として「尽力を頂きました。会は十一月二十二日「かねき亭」に於いて部会顧問をお願いしている菊池節先生初め、元PTA会長の村木良一様はご子息が飯嶋先生の教え子との事で、急遽出席して頂いたので、新たに部会新役員として七野満君、高橋俊秋君を



平成二十年度より会長職を仰せつかり、最初の行事は「星座の会」の挙行でした。この会の名称は生徒の文集「星座」から引用させて頂きました。

特徴は恩師・父兄・定時制OBの親睦会と言う事です。桜井光孝先輩から「今回は飯嶋宏先生（部会顧問が定時制軟式野球大会の五十五周年記念大会に優秀体育指導者として、受賞されているのでその御祝を兼ねてやったらどうか？」との進言を受けたので早速、石神毅副会長と飯嶋先生は同級生だったので相談して、連絡・調整役として「尽力を頂きました。会は十一月二十二日「かねき亭」に於いて部会顧問をお願いしている菊池節先生初め、元PTA会長の村木良一様はご子息が飯嶋先生の教え子との事で、急遽出席して頂いたので、新たに部会新役員として七野満君、高橋俊秋君を

迎え、総勢二十名の参加者を得て、この日は飯嶋先生が茨城県高等学校体育連盟からの受賞式が水戸市であった由、重ね重ねの受賞に宴席は一段と、盛り上がりました。

後日、教え子の桜井忠男様よりスナックと「飯嶋先生の御指導を受けたひとり」として、先生のごひは私共のよろこびでもあります。この札状を頂き皆様のお力添えを頂き、「星座の会」を催すことが出来た事、感謝致します。

定時制部会総会は四月十二日進修同窓会と同日、定時制給食室に於いて行われました。今回の周年記念は学校からの連絡にも関わらず各周年の幹事役が居らず定時制部会より直接出欠の往復はがきを出す事になりました。

祝賀会には五十周年の金澤良一様、原瀬一喜様、四十周年の清水元様、石井幸次様が出席され、総会で部会の予算に対する窮状を知った金澤様より、多大なご芳志を頂いた事ありがたく思っています。その後体育館での祝賀式典、ホテル「カンコー」での祝宴と続き昔話に花が咲き、有意義な一日でした。

二十一年度定時制部会総会も校長先生、学校職員方、部会役員のご協力を賜り終了出来たこと厚く御礼申し上げます。土浦一高定時制部会 会長 武石進

平成二十二年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日 平成二十二年四月十一日(日) 午後一時

二、会場 土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式	
卒業六十周年	高二回
卒業五十周年	高十二回
卒業四十周年	高二十二回
卒業二十五周年	高三十七回
卒業十五周年	高四十七回
卒業十周年	定十回
卒業五周年	定二十回
卒業三周年	定三十五回
卒業一周年	定四十五回

一般会員・周年記念会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会（懇親会）を開催いたします。

お知らせ・話題

水戸地方裁判所所長に 市村陽典氏(高21回)

氏は昭和44年卒。一橋大学法学部に在り、昭和48年司法試験合格。卒業後、東京地裁判事補(中略)高松高裁判事職務代行、東京地裁判事、東京高裁判事職務代行、東京地裁の部総括判事を経て今春水戸地方裁判所所長に就任された。

この間平成11年からの6年間東京地裁行政部裁判長として、原爆症不認定処分取消訴訟、難民不認定処分取消訴訟などを担当、同14、16年には、内閣の司法制度改革推進本部の行政訴訟検討会委員として行政事件訴訟法の大幅改正にも深く関与されている。

この度のせつかくの機会にお願いして、次のメッセージを寄せていただいた。

一高を卒業して四〇年ぶりに故郷で仕事をすることになりました。これまでずっと県外で仕事をしていたせいも、赴任後、親しい級友が大勢身近にいること、茨城のことは多少わかってはいたつもりで着任しましたが、実際に仕事を始めてみると、茨城が全国一の弁護士過疎の県(人口当たりの弁護士数全国最少)であることを初めて知って驚いたり、同じ茨城県内でも東西南北の各地域ごとに気質や環境にかなりの違いのあることを実感するなど、認識を改めさせられることが多い毎日です。



多い毎日です。

今、司法の世界は、先の司法制度改革で決められた様々な改革の実行に次々と着手したばかり、法科大学院を中核とする新たな法曹養成制度の導入、日本司法支援センター(法テラス)の設立、労働審判制度の創設、行政事件訴訟法の改正などに続き、大改革の最後に当たる刑事事件における裁判員裁判制度も五月から始まり、十一月下旬には茨城でも最初の公判手続きが実施されようとしています。

一連の大改革は、これまでの法律制度の改正と異なり、法律家や事件関係者だけの範囲にとどまらず、一般市民にも影響の大きい大きな改革ですので、草創期に当たるしげらぐの間は、いまだ経験のない難しい問題も出てくるでしょうが、柔軟な運用を心がけ、きめ細かな改善を重ねながら、この新しい制度を育て、「より身近で、速くて、頼りがいのある司法」の実現に微力を尽くしたいと思っています。(21年10月) 市村陽典

「墨の絵本」を出版した書家 金子祥代さん(高37回)

神戸市に在住する気鋭の書道家(若屋書道クラブ主宰者)金子祥代さんがこのほど墨の絵本「インクの魔法」を出版した。

金子さんは90年、津田塾大学芸学部卒業後会社勤務の傍ら書を学び続けた。書といえは漢字やかなを思い浮かべ、ともすれば愛好家の世界となりがちだが、今回の出版に際してはそうした枠組みにとらわれず「多くの人にもっと自由に、身近に、面白く書を楽しんで欲しい」と絵本作りを思いついた。さらに金子さんは書への思いを「誰に勧められるでもなく、私は7歳で書を始めました。自然に頑張れるものに出会えたことは幸運でした。中学生頃までは、基礎訓練の時代、



中国の大書家、王羲之の作品を臨書(優れた古典の書写)しました。さらには平安の仮名へと移り、往時を彩った愛の歌を味わいました。30数年間、古代より4千年の間にさまざまに変遷した各時代の文字に深く接して、ますます興味とやる気が湧いていきます。書の変化は目覚し物に姿を変えてしまっています。いま「古典」と呼ばれている作品は皆、当時は前衛の書でした。新しいものへの挑戦の成果なのです。それらに「今」を加えて生

物理チャレンジ 県知事賞を受賞して

三年 深井 洋佑

私は今年の夏、つくば市で行われたコンテスト、「物理チャレンジ2009」の第二チャレンジ(本選)に参加し、金賞ならびに最優秀賞である県知事賞という結果をいただくことができました。非常に光栄に思うとともに、色々とご指導いただいた土浦一高の先生方に心から感謝したいと思います。

このコンテストは、国際物理オリンピックの予選として世界物理年である2005年に始まり、今年で第5回目を迎えます。今年には全国から900人を超える高校生、中学生が応募する盛況となり、本県で行われた第二チャレンジでは、選抜された約100人の学生が4日間にわたり理論・実験課題を含む様々な活動に参加しました。

今年の3月ごろ、物理の柴沼先生に「出てみないか」と誘っていただいた今

き続けること。伝統とはゼロから作るより、ずっと自由で豊かさにつながる力を与えてくれるものではないでしょうか。」金子さんは10年ほど前から現代アートとしての作品作りやガラの作家、ドレスデザイナーとの協同で書の新しい可能性を探すことに取り組んでいる。「インク(墨)の魔法」もその試みの一環である。内容の斬新さにメディアの反響も大きく、地元新聞を始め全国紙等でも紹介されている。

「土浦一高生も伝統という言葉と無縁ではありませぬ。土浦一高の伝統がこの先もしなやかに続いていくことを心から祈っています。」と結んだ。金子さんの今後の活躍に期待するところである。著書「インクの魔法」(幻冬舎ルネッサンス08年刊) 公式ホームページ <http://www.kinkochan.com/>



味違った学ぶことの醍醐味を、少しでも体感することができたかと思えます。県知事賞受賞という結果も非常に嬉しいのですが、今回得ることができた最も大きな財産

は、やはりなんといっても多くの人との出会い、そして物理を学ぶ「楽しさ」を知ることができたことではないかと思えます。この貴重な経験を、これからの進路に少しでも生かしていければと、強く願っています。

読書感想文コンクール 県議会議長賞を受賞して

三年 原市 智奈

「この主人公は、自分だ。葉蔵の第一の手記を読み終えた時、私はそう感じた。自分以外の人間を自分とは、根本的に違うのではないかという不安。他人の痛みが理解できない故に他人を傷つけてしまうことへの恐怖。それでも人を愛し、人と関わりたいと、自分を「道化」として偽る葉蔵の姿は、そっくりそのまま、自分の姿と重なった。

これは、私が昨夏に書いた「人間失格」の読書感想文の冒頭です。この感想文は県コンクールで優秀賞、全国コンクールでは佳作を頂きました。このような大きな賞を頂いたのは初めてだったので、喜んだのはもちろんですが、とても驚きました。ところが、さらに驚いたことに、この感想文が六月のNHK「クローズアップ現代」で紹介され、インタビュまで放映されたのです。今年は太宰治の生誕より百年というところで、その記念番組であったそうなんです。

インタビュ自体は恥ずかしさと緊張で何が何だかよく分からないままに終わってしまったのですが、放映後に思いがけず嬉しいことがありました。放送を視聴された方からお手紙を頂いたのです。反響があるなどは、ましてや感想文の内容に興味を持っただけなどとは思っていませんでした。まさに望外の喜びでした。私は将来、本や文章に関わる職業につきたいと思っています。その夢が叶うよう、まずは志望校合格に向けて、今は受験勉強に励んでいきたいとおもいます。

母校だより

一高祭を振り返って 第62回一高祭実行委員長 高橋 雄太

5月30日、31日に第62回一高祭が開催され、無事成功を収めることができました。ご協力いただいた先生方、地域の方々、ならびに裏から支えてくれた実行委員や実際に活動した生徒など、ありとあらゆる関係者の方々に改めて感謝を申し上げます。

よく考えてみると文化祭というものは不思議なもので、たった2日間の行事のために約1年もの青春の貴重な時間を費やす行事です。企画、運営、実行とすべて生徒中心で行うため、必然的に多くの時間が必要となります。本当だったらその時間で部活や勉強ができたかもしれない。放課後に委員として準備を手伝っている姿を見て物好きだなあと思っていた人もいます。しかし、その犠牲を払ってでも補って余りある対価を得ることができた私は信じてやみません。

例えば普段の生活では到底開けられないような扉をあけ、作業をする上で今まで感じたことのない責任とそれに伴う楽しみ。成功した後のえもいわれぬ充実感。これは準備してきた中で私が感じたものの一部です。これとは違っても、参加者は活動を通して各々得たものがあるはず。その得たものが、一高祭終了後も心の中に残り、その人の糧の一部へと変化していくものであるのだと思います。

一高祭全体を振り返って私が感じたのは、一高生は洗練されていない。いわば宝石の原石であるということです。これからの人生を通して各々が自分の輝きを探していくのだ。と。今回の行事を通して、生徒は計り知れない才能の片鱗を見せて行事の成功へと導いてくれました。一高祭がその才能を發揮するきっかけとなってくれたならば、と思います。さらに、私はこうも感じたのです。一高祭は社会の縮図である、と。

社会では物事を完遂するために綿密な計画を立て、人々と積極的にコミュニケーションをとり、実行するのに膨大な時間と労力を費やします。まさに前述した内容に一致しています。縮図とせうのは少々大げさであるかもしれないが、それでも社会を象徴しているという事実には変わりありません。

最後に、今年も一高祭の準備活動を通して多くの反省点が見つかりました。これを生かすかどうかは次の実行委員次第です。来以降も伝統あるこの行事が続くこと、ならびに改良によってよりよい一高祭が開催されることを心から願っています。

歩く会新コースの開拓 第四一回歩く会実行委員長 二年 幡野 博基

今年は今まで歩いたことのないコースで歩く会を行うため歩く会準備委員会を三月に発足し、それから七ヶ月間、ずっと歩く会を創ってきました。

「歩いていて飽きない」「いろんな景色が楽しめる」そんなコースを創るために四月の創立記念日までにコース案をいくつか作り、下見をして六月までに一つ



一高祭



歩く会

の案にまとめました。実行委員会を招集してからそのコースの問題点を洗い出し、微調整し、今回のコースを創りました。今年度は新しい試みとしてスタンプの制作とチェックポイントでの給の配布をやりました。さらに一般生徒がより安全に歩行できるように重要な交通指導箇所には委員を配置するといった工夫もしました。委員の共通理解を図るために九月上旬に仮必修というものを作成したり職員用資料の配布も行ったりし、完成度の高い歩く会にできるように努めました。

も委員会の活動を支えてくださった太田先生には心から感謝いたします。この場をお借りして一言お礼を言いたいと思います。ありがとうございます。

もうあの実行委員の素晴らしいメンバードと一緒に仕事ができないのかと思うと大変寂しく思います。

来年になって今の一年生たちが今年度の歩く会よりも良い歩く会を創り上げられるように、今年良かった点と反省すべき点をまとめてしっかりと引き継ぎたいと思います。

サマースクールを通して 二年 伏野 拓也

一日目のテーマ学習、三日目の雄国山の登山では、自然の素晴らしさを体験することができた。水族館で見た海や川の生物や、あぶくま洞の中で見た、言葉で言い表すことができないくらい素晴らしい鍾乳石、素晴らしい自然が残っている雄国山、これらは人間がこれからも守っていかねばならないものだと思う。失われてしまった自然を元に戻すには大変な時間がかかるし、もしかしら元に戻すことは不可能かもしれない。自然を壊し、人間の思ったままに自然を作り変えることは、とても簡単にできる。だからこそ、私たちは、これらの自然を破壊することなく、後世に素晴らしい自然を残すために、精一杯の努力をしなければならないと思う。普段は勉強で忙しいが、自然に触れ合う機会を持つことは難しいが、今回のサマースクールでは、福島県の素晴らしい自然を存分に味わうことができた。

二日目の午前中に合った特別講座は、普段の授業とは異なり、教科書にそった勉強ではなく、今までの学んできたことを実際の生活に役立てるための講座で、普段の授業とは全く違う実際の生活にとっても役立つものだった。先生方がとても工夫してくださった講座は分かりやすく、そしてとても興味深いものだった。これからの生活にこの講座を生かしていくことで、人生をより良いものにしていく

と思う。

普段は友人たちと同じ場所で長い時間学習するという機会もなかなかあることができないが、今回のサマースクールでは二日目の10時間学習をはじめとして、同じような目標を持つ仲間同士と一緒に学習することができた。自分以外の人が、ちがどのような意識で学習しているのか、そしてどのような学習をしているのかなどを知ることができた。このことを刺激にして、これから学習により一層力を入れていきたいと思う。

今回のサマースクールは、本当に貴重な体験になったと思う。友達がいるということは、普段は当たり前のことと思いが、特別意識することは少ないが、三日間友達と一緒に過ごしたことで、仲良く話すことができ、困った時に力を貸してくれる友人がいるということは、とても素晴らしいことだと改めて感じることができた。そして、友人と協力することの素晴らしさ、自然の大切さなどをしみじみと感じることができた。

人の上に立つことができる人間になるためには、頭脳が優れているだけではなく、自然や友人に対する感謝の心を持つことが大事だと思う。サマースクールを通して、普段の学習では学ぶことができないこともたくさん学ぶことができた。これからの人生に、今回のサマースクールで学んだことを生かし、今の社会をよりよいものにするために努力していきたい。



サマースクール

職員室だより

国語科より

主任 清水 智恵

我々国語科は、理数科がなくな... 普通科八クラス体制となつて... 以来、九人で構成されています...

ある言葉に触れて、心が感じ動... ことが的確な「示唆」を得たと... いうことでしようか...

部活動報告

生徒指導部

照 沼 裕

日頃より本校の部活動に対しま... して、ご理解とご支援を賜り有難... うございます...

表 (数字の単位は%、4月現在)

Table with 3 columns (1年, 2年, 3年) and 2 sub-columns (男, 女) for each year. Rows include 運動部, 文化部, 小計, 学年, 全体.

どに積極的に参加していること... は、生徒会本部顧問としてうれし... い限りです...

- 弓道部 高校総体県予選会 女子団体1位
全国高校総体弓道競技(奈良県)に出場
囲碁部 全国高校囲碁選手権茨城県大会...

漫画研究部 漫画甲子園出場
物理チャレンジ 第5回全国物理コンテスト「物理チャレンジ」...



一高祭における写真部の展示

平成二十一年度入試報告
東大・京大・東工・一橋45名
国立大医学科に16名

東大は22入試での雪辱期す
進路指導部長 門井了

平成21年度入試は、学区が撤廃された高校入試ではじめて入ってきた生徒たちが挑戦する、注目の入試でした。昨年度易化したセンター試験は、今年度また難化、文系7科目・理系7科目の全国平均点でそれぞれ33点、35点下まりました。本校生の平均点も、文系が67.9点(昨年比マイナス18点)、理系が67.6点(昨年比マイナス38点)とダウンしました。しかし、二極化が進む入試において、高得点が求められる難関大受験者のセンター得点はさほど落ち込まず、本校受験生の中には第一段階選抜で不合格になり二次試験に進めない者や、志望を下げざるを得ない者が少なからずいたことが、厳しい結果につながりました。

今春の入試結果について、主なものを挙げてみます。
1 東京大学16名(新卒10名)
2 京都大学5名(新卒3名)
3 東工大学13名(新卒5名)
4 一橋大学11名(新卒3名)
5 東北大学27名(新卒20名)
6 筑波大学38名(新卒30名)
7 国立大医学科16名(新卒4名)
東大は残念な結果でしたが、後期で2名合格は大健闘です。
京大・東工・一橋の合格者の合計29名は、この4年間で突出(20年19名、19年17名、18年13名)しており、東大も含めた4大の合計が62名と多かった14年度の29名と同数で、評価できる結果です。
本校新卒生の難関国立大及び医

学科志向は、今年度の入試でも変化は見られませんでした。東大、東北大、東工大、一橋大、お茶の水女子大、京都大、筑波大の7大学の新卒生の延べ受験者は261名(昨年256名)で、これは国立大延べ受験者総数385名(昨年383名)の67.8%(昨年66.8%)にあたります。
前述したように、難関大・難関学部(医学科)においてはセンター試験での高得点が求められます。授業を中心に3教科の基礎を、1、2年次に主要3教科の基礎を、3年次にしっかりとつけておくことが求められていると言えます。
本年度の私立大の総受験者数(新卒生・過年度卒生の延べ合計数)は昨年比84名増の14436名、合格者は87名増の71436名、新卒生に限ると、受験者数が18名減の989名、合格者数では16名増の349名でした。新卒の早慶・上智の合計受験数は352名で昨年比24名減、合格者は22名増の100名でした。立教、明治、青山、東京理科、国際基督、東京女子、中央、法政、学習院、津田塾、日本女子11大学の受験者数は昨年比33名増の521名、合格者は同数の182名でした。
今年度の新卒生進学率(すべて4年制大学)は55.8%で、昨年比4.1ポイント減でした。しかし、これも、難関大を目指す生徒が多い本校にあつてはいたしかたなく、一浪は宿命と考えて、142名の再受験者には、現役時代の初志貫徹、合格を勝ち取ってもらいたいと祈念するものです。
本校を取り巻く環境も年々厳しくなっております。しかし、職員一同、優秀な生徒を教えられたいという喜びを持って、将来にわたって伸び続ける生徒の育成に尽力したいと考えております。ご支援よろしくお願ひします。

平成21年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

大 学	合格者	新 卒
旭川医科大	1	0
北海道大	3	1
弘前大	2	0
東北大	27	20
山形大	3	1
茨城大	7	7
筑波大	38	30
群馬大	1	1
埼玉大	3	2
千葉大	12	8
お茶の水女子大	8	6
電気通信大	1	1
東京大	16	10
東京外語大	1	1
東京学芸大	1	1
東京工業大	13	5
東京海洋大	1	0
東京農工大	6	2
一橋大	11	3
横浜国立大	4	3
静岡大	1	0
名古屋大	1	1
名古屋工大	1	1

大 学	合格者	新 卒
京 都 大	5	3
岡 山 大	1	0
山 口 大	1	0
九 州 大	1	1
県立医療大	1	1
首都大東京	3	1
静岡県立大	2	1
国公立大計	176	111
(うち医学科)	16	4
防 衛 大	1	0
防衛医科大	1	0
気象大学校	1	1
大学校計	3	1

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	8	7
学習院大	9	4
慶 応 大	58	27
国際基督大	7	5
上 智 大	21	14
中 央 大	57	18
津田塾大	8	8
東京女子大	2	2
日本女子大	17	10
東京理科大	107	45
明 治 大	89	41
立 教 大	58	32
早稲田大	109	59
法 政 大	26	14
北 里 大	7	2
芝 浦 工 大	10	3
日 本 大	15	7
同志社大	2	0
立命館大	7	4
産業医大	1	0
そ の 他	96	45
私立大計	714	347
合格者総数	893	459

平成20年度 進修同窓会決算書

収入額 一金 14,902,555円也
支出額 一金 12,592,589円也
差引残高 一金 2,309,966円也 (平成21年度へ繰越)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 寄付金, 雑収入, 合計, and 寄付者名.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額, 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 予備費, 合計.

※卒業記念品費の超過分は予備費から流用

上記のとおり決算しました。

平成21年3月31日

次城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成21年3月31日

監事 熊木 士郎 印

監事 田嶋 栄吉 印

平成21年度 進修同窓会予算書

収入額 一金 13,182,000円也
支出額 一金 13,182,000円也
差引残高 一金 0円也

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 雑収入, 合計.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減(Δ), 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 予備費, 合計.

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

平成21年4月12日

次城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長

平成二十一年度 県外視察報告

高二十三回 久保田 高広

去る七月二十五、二十六日、同窓会本部役員・旧本館活用委員十七名で、長野県内の文化財建造物の視察に行つてまいりました。

最初に見学したのは、旧開智学校(松本市、明治九年、重要文化財)です。観光地でもあり、展示品、庭園なども整備が行き届いている印象でした。

次が、旧制松本高校本館・講堂(同、大正九年、同)です。本来の学校の敷地が「あがたの森公園」となり、本館と講堂が保存されています。松本市が管理し、大小の催事、市民のサークル活動の場として利用されています。

当日は満室の盛況で、私達は、椅子とつながった机の並ぶ復元教室で、館長さんから保存と活用の両立の苦心などを伺いました。

最後が、信州大学繊維学部講堂(上田市、

会費納入のお願い

平成二十年度の会費納入状況は、平成二十一年三月末現在、二、六四三名の皆様が

編集後記

恒例の卒業周年記念が、開催されましたが、従来の四世代(六十、五十、四十、二十五)各周年に加えて、本年は新しく十五周年の方々をお迎えしました。

若い世代との交誼をさらに深めようとの趣旨で、試験的に行つたのですが、好評でしたので、規約改正も経て次年度以降にも継続する方針です。

海外研修が企画されています。東海岸の海外研修が企画されています。東海岸の都市ニューヨーク・ボストン・ワシントン等を中心にハワード大学・スミソニアン博物館・NASA等米国が誇る文化施設に接し、視野を広げる活動です。

併せて外国語によるコミュニケーション能力の向上も意図されます。国際化時代にも資する活動と考えられ、同窓会としても何らかの形で支援をしようとして検討されています。

今年も残り少なくなってきました。一〇年振りであれば国内外で多くの「地殻変動」が見られました。米国では初の黒人大統領、日本では与野党逆転の「政権交代」など歴史のターニングポイントに居合わせ

昭和四年、登録文化財)です。外部は特に凝った意匠ではないのに対し、内部はニス塗り生地仕上げの荘重な雰囲気です。通常非公開ですが、担当職員の方が出勤して下さり、照明や補修など必要なところは手を加えながら、原型を崩さないよう配慮しています、と伺いました。

この県外視察は毎年夏頃に企画されています。役員・委員に限定することなく、皆様の御参加を募りたいと思います。関心のある方がいらっしゃいましたら、学校または同窓会事務局まで御連絡下さい。

土浦一高
電話 〇二九八二二〇一三七
FAX 〇二九八二六三三二一
ホームページアドレス
http://www.tsuchihara-h.ed.jp

ら、八、六四一、〇〇〇円を頂きました。今年度も納入いただきたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられます。ご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

せたく観を呈しました。展望の見えにくい社会状況の下、願わくは単なる変化で終わることなく、大きな成果を期待するところで、す。明るい年をお迎え下さることを願ひます。

進修同窓会会報 66号
発行日 平成二十一年十二月一日

会報編集委員会
編集委員長
編集委員

校内
井豊 鈴宇 鈴堀 古富 長片 飯上 木青
田 上崎 木川 木越 徳永 瀬岡 村木 島山
正利 淳仁 志 尚 道宗 幹 幸和
治明 一郎 郎博 一也 男博 弘夫 夫義